

かれており、旧暦11月1日になると、組ごとに共同出資で飼っていたカンカーウワー(豚)をつぶし、出資口数に応じて各家庭に配当したそうです。豚の血はチーチキ(血付け)といい、ゲッキツの小枝につけ、各家庭の門や畜舎に差し、悪病除けとしたそうです。集落への両入口、旧藩所下側、テラ屋の4か所に、豚の下あごを左右に張り渡したしめ縄に吊るし、通行人はその下を通過していたそうです。

真栄田区では旧暦8月29日に、カンカー毛の御神に豚料理を供え、悪疫防止の御願をしたといいます。シンメーナービで煮た豚料理を竹串に刺し、人数に応じて各家庭に配られたようです。集落内では中道(ナカミチ)の入口の所、カンカー毛の松の木から、アガリの福木に左縄を張り渡し、恩



仲泊のカンカーの様子

納と同様、豚の下あごを吊るし通行人はその下を通過していたといえます。

沖縄県では一般的に健康祈願や厄除け祈願とされる鬼餅(ムーチャー)づくりは、旧暦12月7日もしくは8日に行われることが多いです。しかし、もともと同じムラであったとされる谷茶、富着、前兼久、仲泊の4集落では旧暦11月1日にカンカーを行い、その日にムーチャーも作っていたことから「カンカームーチャー」と呼ばれるようになりました。広報おんな401号でも紹介しましたが、カンカーは集落の祈願であり、カンカームーチャーは各家庭での祈願となっています。各家庭では、ムーチャーのゆで汁を屋敷周辺に撒き、ムーチャーを包んでいた月桃の葉を十字にして門に結ぶことで、家庭内に悪疫が侵入するのを防ごうとしていたと考えら



塩屋のカンカーの様子

れます。

2010年に吉山森花が行った塩屋区での聞き取り調査では「カンカーの時には豚の中身料理が供えられ、ユウナの葉を器代わりにして分けてもらった。大きいユウナの葉を探るのが重要で、子どもたちは現在のウカミヤのところでユウナの葉を手を持ち、順番良くならんで分けてもらっていた」とあります。

戦前から行われていたとされるカンカー儀礼は、現在ではだいぶ簡素化されてしまいましたが、今でも村内各地で継承されている儀礼です。いつの時代になっても家族や集落の安寧を願う人々の思いは変わることはないようです。(町田)

#### 参考文献・参考史料

- 『恩納村誌』 仲松弥秀 1980
- 『いやしの里 名嘉真』 恩納村名嘉真区 2012
- 『花と水の里 喜瀬武原字誌』 字誌編纂委員会 2005
- 『恩納字誌』 字恩納自治会 2007
- 『真栄田誌』 恩納村真栄田区自治会 2017
- 塩屋区聞き取り調査(吉山森花) 2010
- 沖縄タイムス